

なぜ米国を去り 日本で教えたいと思ったのか

図斎 大 教授

(ミクロ経済理論)

私が本学に赴任したのはこの春からですが、2011年にPh.Dを取得してから2020年夏に帰国するまで長く米国の大学に勤めていました。そこで永住権も得ていたのですが、日本の大学に移りたいと思ったのはゼミを持ちたかったからです。

米国でも学部生に卒論やプロジェクトの指導をしていました。それは各個人に対する研究指導のコースワークでした。つまり、毎週なにかの課題を与えながら、普通のレポート科目と同様に最後の提出物の出来を見て成績を付けておしまい、というものです。きちっと研究や論文の書き方を体系立てて教えるので、そこまでたどり着いた学生はコンサル、MBA、そして経済学の大学院で全米でも上位のところに行ったりしました。指導する中には社会人から大学に戻ってきた学生もいたので、サシで飲みに行くこともありました。しかし、何か物足りなかったのです。

私自身が日本で学生として体験したところでは、日本のゼミというのは単なる一科目ではなく、サークルやバイトと並んで、大学時代の生活の中心の一つになるものでした。1, 2回生の皆さんは高校のクラスルームや文化系の部活を思い浮かべてください。ゼミでは教員がテーマや目標は与えますが、そこから毎週の活動で何をしていくのかは学生たちが自ら考え進めていき、教員は脇からアドバイスを与えながら見守ります。学生がみんなで協力して主体的に学びを進めていくというのが、普通のコースワークと大きく異なります。その中でほかのゼミ生との横のつながりを作っていくのです。

そして、4回生に上がった時には新たな3回生に対して先輩として導く立場になり、縦のつながりができていきます。卒業生会や就職・進学先で世代を超えてつながることもあります。私自身が学部学生だった時のゼミは経済学部には珍しく学者が多いこともあり、前の職場で辛かった時など先輩に相談に乗ってもらったり、また優秀な後輩の研究に刺激を受けたりなど、今でもなおゼミとのつながりを強く意識しています。ゼミというのは年を重ねるごとにどんどんと新たな人を積み重ね、お互いの成長と熟成を見守る緩やかなコミュニティにもなるのです。

教員と学生との関係も、ゼミにおいては教える・教えられるという一方的なものではありません。普通のコースワークなら試験をして点数を付けなければならないので、教員自身が「正解」を知らないといけません。しかし「正解」がまだ見えていない未知のことへと進んでいくことにこそ、

知的に考えることの面白さや意義があります。ゼミではテーマや成績評価をふんわりとしていますが、単に楽にするということではなく、教員自身も学生諸君と共に真摯な態度で新しいフロンティアに向かっていくために柔軟にしているのだと私は理解しています。

私自身は来年度からいよいよゼミを本学で始めることになります。そしてテーマも、私が既に研究しているミクロ経済・ゲーム理論の分析だけでなくコンピュータシミュレーションや、さらには社会の模擬実験としての「ゲーム」自体の制作という、経済学では比較的未開拓なところへと踏み出す予定です。みんなと共にフロンティアに進むこと、そしてこの第1期生から私のゼミのコミュニティーを積み上げていくことに、わくわくしています。どうぞよろしく。そして他のゼミを選んだ、あるいはこれから選ぶ人たちも、ゼミでの「学び」、そして「つながり」が、今後の人生の糧となることを祈っています。